

題名: 斜陽

作者: 太宰治 (津島 修治)

朝、食堂でスープを一さじ、すっと吸ってお母さまが、「あ。」と幽かな叫び声を挙げになった。

「髪の毛？」スープになにか、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ。」

お母様は、何事も無かったように、またひらりと一さじ、スープをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたままひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。

ヒラリ、という形容はう形容は、お母さまの場合、決して誇張では無い。

婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などとは、てんでまるで、違っていらっしやる。弟の直治がいつか、お酒を飲みながら、姉の私に向かってこう言った事がある。

「爵位しゃくいがあるから、貴族だというわけにはいかないんだぜ。爵位が無くても、天爵というものを持っている立派な貴族のひともあるし、おれたちのように爵位だけは持っていて、貴族どころか、賤民せんみんなにちかいのもいる。岩島なんてのは(と直治の学友の伯爵のお名前を挙げて)あんなのは、まったく、新宿の遊廓ゆうかくの客引き番頭よりも、もっとげびてる感じじゃねえか。こないだも、柳井やない(と、やはり弟の学友で、子爵の御次男のかたのお名前を挙げて)の兄貴の結婚式に、あんちきしょう、タキシードなんか着て、なんだってまた、タキシードなんかを着て来る必要があるんだ、それはまあいいとして、テーブルスピーチの時に、あの野郎、ゴザイマスルという不可思議な言葉をつかったのには、げっとなった。気取るという事は、上品という事と、ぜんぜん無関係なあさましい虚勢だ。高等御おん下宿と書いてある看板が本郷あたりによくあったものだけれども、じっさい華族なんてもものの大部分は、高等御乞食おんこじきとでもいったようなものなんだ。しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族は、まあ、ママくらいのもんだろう。あれは、ほんものだよ。かなわねえところがある」

スープのいただきかたにしても、私たちなら、お皿さらの上ですこしうつむき、そうしてスプウンを横に持ってスープを掬すくい、スプウンを横にしたまま口元に運んでいただくのだけれども、お母さまは左手のお指を軽くテーブルの縁ふちにかけて、上体をかがめる事も無く、お顔をしゃんと挙げて、お皿をろくに見もせずスプウンを横にしてさっと掬って、それから、燕つばめのように、とでも形容したいくらいに軽く鮮やかにスプウンをお口と直角になるように持ち運んで、スプウンの先端せんたんから、スープをお唇のあいだに流し込むのである。

そうして、無心そうにあちこち傍見わきみなどなさりながら、ひらりひらりと、まるで小さな翼のようにスプーンをあつかい、スープを一滴もおこぼしになる事も無いし、吸う音もお皿の音も、ちっともお立てにならぬのだ。

それは所謂正式礼法にかなったいただき方では無いかも知れないけれども、私の目には、とても可愛らしく、それこそほんものみたいに見える。また、事実、お飲物は、口に流し込むようにしていただいたほうが、不思議なくらいにおいしいものだ。けれども、私は直治の言うような高等御乞食なのだから、お母さまのようにあんなに軽く無雑作にスプーンをあやつる事が出来ず、仕方なく、あきらめて、お皿の上にうつむき、所謂正式礼法どおりの陰気ないいただき方をしているのである。スープに限らず、お母さまの食事のいただき方は、頗る礼法にはずれている。お肉が出ると、ナイフとフォークで、さっさと全部小さく切りわけてしまって、それからナイフを捨て、フォークを右手に持ちかえ、その一きれ一きれをフォークに刺してゆっくり楽しそうに召し上がっていらっしやる。

また、骨つきのチキンなど、私たちがお皿を鳴らさずに骨から肉を切りはなすのに苦心している時、お母さまは、平気でひょいと指先で骨のと、ころをつまんで持ち上げ、お口で骨と肉をはなして澄ましていらっしやる。そんな野蛮な仕草も、お母さまがなされると、可愛らしいばかりか、へんにエロチックにさえ見えるのだから、さすがにほんものは違ったものである。骨つきのチキンの場合だけでなく、お母さまは、ランチのお菜のハムやソーセージなども、ひょいと指先でつまんで召し上る事さえ時たまある。

「おむすびが、どうしておいしいのだから、知っていますか。あれはね、人間の指で握りしめて作るからですよ」とおっしゃった事もある。本当に、手でたべたら、おいしいだろうな、と私も思う事があるけれど、私のような高等御乞食が、下手に真似してそれをやったら、それこそほんものの乞食の図になってしまいそうな気がするので我慢している。弟の直治でさえ、ママにはかなわねえ、と言っているが、つくづく私も、お母さまの真似は困難で、絶望みたいなものをさえ感じる事がある。

いつか、西片町のおうちの奥庭で、秋のはじめの月のいい夜であったが、私はお母さまと二人でお池の端のあずまやで、お月見をして、狐の嫁入りと鼠の嫁入りととは、お嫁のお支度がどちらがうか、など笑いながら話合っているうちに、お母さまは、つとお立ちになって、あずまやの傍の萩のしげみの奥へおはいりになり、それから、萩の白い花のあいだから、もっとあざやかに白いお顔をお出しになって、少し笑って、「かず子や、お母さまがいま何をなさっているか、あててごらん」とおっしゃった。

「お花を折っていらっしやる」と申し上げたら、小さい声を挙げてお笑いになり、

「おしっこよ」とおっしゃった。ちっともしゃがんでいらっしゃらないのには驚いたが、けれども、私などにはとても真似られない、しんから可愛らしい感じがあった。

けさのスウプの事から、ずいぶん脱線しちゃったけれど、こないだ或る本で読んで、ルイ王朝の頃の貴婦人たちは、宮殿のお庭や、それから廊下の隅などで、平気でおしっこをしていたという事を知り、その無心さが、本当に可愛らしく、私のお母さまなども、そのようなほんものの貴婦人の最後のひとりなのではなかろうかと考えた。さて、今朝は、スウプを一さじお吸いになって、あ、と小さい声をお挙げになったので、髪の毛？とおたずねすると、いいえ、とお答えになる。

「塩辛かったかしら」

けさのスウプは、こないだアメリカから配給になった罐詰のグリンピースを裏ごしして、私がポタージュみたいにしたもので、もともと料理には自信が無いので、お母さまに、いいえ、と言われても、なおも、はらはらしてそうたずねた。

「お上手に出来ました」お母さまは、まじめにそう言い、スウプをすまして、それからお海苔で包んだおむすびを手でつまんでおあがりになった。私は小さい時から、朝ごはんがおいしくなく、十時頃にならないと、おなかがすかないので、その時も、スウプだけはどなうやらすましたけれども、食べるのがたいぎで、むすびをお皿に載せて、それにお箸を突込み、ぐしゃぐしゃにこわして、それから、その一かけらをお箸でつまみ上げ、お母さまがスウプを召し上げる時のスプーンみたいに、お箸をお口と直角にして、まるで小鳥に餌をやるような工合にお口に押し込み、のろのろといただいているうちに、お母さまはもうお食事を全部すましてしまって、そっとお立ちになり、朝日の当たっている壁にお背中をもたせかけ、しばらく黙って私のお食事の仕方を見ていらして、「かず子は、まだ、駄目なのね。朝御飯が一番おいしくなるようにならないと」とおっしゃった。

「お母さまは？おいしいの？」

「そりやもう。私は病人じゃないもの」

「かず子だって、病人じゃないわ」

「だめ、だめ」

お母さまは、淋しそうに笑って首を振った。私は五年前に、肺病という事になって、寝込んだ事があったけれども、あれは、わがまま病だったという事を私は知っている。けれども、お母さまのこないだの御病気は、あれこそ本当に心配な、哀しい御病気だった。なのに、お母さまは、私の事ばかり心配していらっしゃる。

「あ」

と私が言った。

「なに？」

とこんどは、お母さまのほうでたずねる。

顔を見合せ、何か、すっかりわかり合ったものを感じて、うふふと私が笑うと、お母さまも、にっこりお笑いになった。

何か、たまらない恥ずかしい思いに襲われた時に、あの奇妙な、あ、という幽かな叫び声が出るものなのだ。私の胸に、いま出し抜けにふうっと、六年前の私の離婚の時の事が色あざやかに思い浮んで来て、たまらなくなり、思わず、あ、と言ってしまったのだが、お母さまの場合は、どうなのだろう。まさかお母さまに、私のような恥ずかしい過去があるわけは無し、いや、それとも、何か。

「お母さまも、さっき、何か思い出しになったのでしょうか？　どんな事？」

「忘れたわ」

「私の事？」

「いいえ」

「直治の事？」

「そう」

と言いかけて、首をかしげ、

「かも知れないわ」

とおっしゃった。

弟の直治は大学で中途で召集され、南方の島へ行ったのだが、消息が絶えてしまって、終戦になっても行先が不明で、お母さまは、もう直治には逢えないと覚悟している、とおっしゃっているけれども、私は、そんな、「覚悟」なんかした事は一度もない、きっと逢えるとばかり思っている。「あきらめてしまったつもりなんだけど、おいしいスウプをいただいて、直治を思っ

て、たまらなくなった。もっと、直治に、よくしてやればよかった」

直治は高等学校にはいった頃から、いやに文学にこって、ほとんど不良少年みたいな生活をはじめて、どれだけお母さまに御苦労をかけたか、わからないのだ。それだのにお母さまは、スウプを一さじ吸っては直治を思い、あ、とおっしゃる。私はごはんを口に押し込み眼が熱くなった。

「大丈夫よ。直治は、大丈夫よ。直治みたいな悪漢は、なかなか死ぬものじゃないわよ。死ぬひとは、きまって、おとなしくて、綺麗で、やさしいものだわ。直治なんて、棒でたたいたって、死にやしない」

お母さまは笑って、「それじゃ、かず子さんは早死にのほうかな」と私をからかう。

「あら、どうして？ 私なんか、悪漢のおデコさんですから、八十歳までは大丈夫よ」

「そうなの？ そんなら、お母さまは、九十歳までは大丈夫ね」

「ええ」と言いかけて、少し困った。悪漢は長生きする。綺麗なひとは早く死ぬ。お母さまは、お綺麗だ。けれども、長生きしてもらいたい。私は頗るまごついた。

「意地わるね！」と言ったら、下唇がぷるぷる震えて来て、涙が眼からあふれて落ちた。

蛇の話をしようかしら。その四、五日前の午後に、近所の子供たちが、お庭の垣の竹藪から、蛇の卵を十ばかり見つけて来たのである。子供たちは、

「蝮の卵だ」

と言い張った。私はあの竹藪に蝮が十匹も生れては、うっかりお庭にも降りられないと思ったので、

「焼いちゃおう」と言うと、子供たちはおどり上がって喜び、私のあとからついて来る。

竹藪の近くに、木の葉や柴を積み上げて、それを燃やし、その火の中に卵を一つずつ投げ入れた。卵は、なかなか燃えなかった。子供たちが、更に木の葉や小枝を焰の上にかぶせて火勢を強くしても、卵は燃えそうもなかった。

下の農家の娘さんが、垣根の外から、

「何をしていらっしゃるのですか？」

と笑いながらたずねた。

「蝮の卵を燃やしているのです。蝮が出ると、こわいんですもの」

「大きさは、どれくらいですか？」

「うずらの卵くらいで、真白なんです」

「それじゃ、ただの蛇の卵ですわ。蝮の卵じゃないでしょう。玉の卵は、なかなか燃えませんよ」

娘さんは、さも可笑しそうに笑って、去った。

三十分ばかり火を燃やしていたのだけれども、どうしても卵は燃えないので、子供たちに卵を火の中から拾わせて、梅の木の下に埋めさせ、私は小石を集めて墓標を作ってやった。

「さあ、みんな、拝むのよ」

私がしゃがんで合掌すると、子供たちもおとなしく私のうしろにしゃがんで合掌したようであった。そうして子供たちとわかれて、私ひとり石段をゆっくりのぼって来ると、石段の上の、藤棚の蔭にお母さまが立っていらして、「可哀そうな事をするひとね」

とおっしゃった。

「蝮かと思ったら、ただの蛇だったの。けれど、ちゃんと埋葬してやったから、大丈夫」

とは言ったものの、こりやお母さまに見られて、まずかったかなと思った。

English:

In the morning, taking a sip of soup in the dining room, Mother softly gasped, “Oh.”
“A piece of hair?” I thought there may be something unpleasant in the soup.
“No.” Mother, like nothing happened, gracefully took another spoonful of soup, calmly turned her face to the side, looked out the kitchen window at the blooming cherry blossoms, and with her face still turned, again gracefully taking another sip between her small lips.

The description of ‘graceful,’ in the case of my Mother, is not an exaggeration. Her way of eating is completely different from what you see in women’s magazines. One day, my younger brother Naoji, while drinking sake, faced me and said this:

"Just because someone has a title doesn't necessarily make them a noble. There are fine nobles who possess something called 'heavenly nobility,' even without a title. But there are also people who, like us, only hold a title and are far from noble, almost like commoners. As for someone like Iwashima (referring to Count Iwashima, a classmate of Naoharu), he honestly feels even more vulgar than the manager soliciting clients in Shinjuku's red-light district. The other day, too, referencing Yamai (a friend of my younger brother, the second son of a Viscount), at his older brother's wedding, that showed up wearing a tuxedo. Why on earth did he have to show up wearing a tuxedo? But setting that aside, when that guy used the incomprehensible word *gozaima-suru* during the table speech, I was like, yuck!' The act of being pretentious is a completely unrelated, despicable pretense compared to elegance. Signs saying 'High-Class Boarding House' were often seen around Hongo, but in reality, the majority of nobles could almost be called 'high-class beggars.' True nobility would never put on such a poor act as someone like Iwashima. Even in our family, I'd say that, well, Mother is probably the only true noble. She's the real thing. There's something about her that cannot be matched."

Even in the way of eating soup, if it were us, we would lean slightly over the plate, hold the spoon sideways to scoop up the soup, and bring it to our mouths to eat. But Mother, placing her left-hand finger lightly on the table's edge, without bending her upper body, keeps her face raised proudly, swiftly scoops the soup without even properly looking at the plate, and, as lightly and gracefully as if like a swallow, brings the spoon to her mouth at a right angle, pouring the soup between her lips from the tip of the spoon. And then, seemingly without a care, she glances

around, holding the spoon lightly, as if it were a small wing, without spilling even a single drop of soup and without making a single sound of sipping or of the plate.

It may not be a formal way of eating, but to my eyes, it is very pretty and authentic. Also, in fact, drinks are surprisingly delicious when you let them flow into your mouth. However, since I am, as Naoji says, a high-class beggar, I cannot hold a spoon as lightly as Mother does. Reluctantly, I lower my head over the plate and, unable to help it, eat in the so-called proper but gloomy manner of formal etiquette.

Not just soup, but Mother's way of eating in general is utterly out of line with proper manners. When meat is served, she quickly cuts it all into small pieces with a knife and fork, then sets the knife aside, switches the fork to her right hand, and eats each piece one by one, leisurely and cheerfully enjoying herself. Moreover, when it comes to bone-in chicken, while we struggle to separate the meat from the bone without making any noise with our plates, Mother effortlessly picks up the bone with her fingertips, lifts it, separates the meat from the bone with her mouth, and carries on as if nothing happened. Even such a savage gesture, when performed by Mother, appears not only endearing but even strangely erotic, proving that the real deal is truly different. Not only in the case of bone-in chicken, but Mother occasionally even picks up lunch items like ham or sausage with her fingertips and eats them."

"Do you know why rice balls are so delicious? It's because they're made by being firmly shaped with human fingers," they once said. I sometimes think that if you ate them with your hands, they'd probably taste even better. But for someone like me, a so-called refined beggar, trying to imitate that poorly would end up making me look like a real beggar instead, so I hold myself back. Even my younger brother, Naoji, says, 'I can't compete with Mom.' And honestly, I too often feel that imitating Mother is incredibly difficult—sometimes to the point of despair.

One evening, early in autumn, under a beautiful moonlit sky in the backyard of our house in Nishikatamachi, I was sitting with Mother by the edge of the pond in the garden pavilion, enjoying the moon-viewing. We laughed together, discussing the differences between the bridal preparations of a fox's wedding and a mouse's wedding. Then, suddenly, Mother stood up and walked into the dense cluster of bush clover near the pavilion. From within the white blossoms of the clover, her face—paler and even more strikingly white than the flowers—emerged. She smiled faintly and said, 'Kazuko, can you guess what I'm doing right now?'

When I answered, 'You're picking flowers,' she let out a small laugh and said, 'I'm peeing.' I was surprised, as she wasn't squatting at all. But still, there was an utterly endearing quality about her that I could never hope to imitate.

We've strayed quite far from this morning's soup, but the other day, I read in a book that during the era of the French monarchy, noblewomen of the Louis dynasty would casually relieve themselves in palace gardens or even in the corners of hallways. I found that unselfconsciousness truly charming, and it made me wonder if my mother might be one of the last true noblewomen of that kind.

Now then, this morning, when she took a sip of the soup, she let out a small 'Ah.' I asked, 'A hair?' but she replied, 'No.'

'Was it too salty?' This morning's soup was something I made by blending a can of green peas from an American ration into a sort of potage. Since I'm not confident in my cooking, even when Mother said, 'No,' I still felt uneasy and asked nervously.

'You did a wonderful job.' She said this earnestly, finished the soup gracefully, and then picked up a rice ball wrapped in nori with her hands and ate it.

Since I was a child, I've never enjoyed breakfast, and my appetite doesn't usually come until around ten. Even then, I somehow managed to finish the soup, but eating the rice ball felt like a chore. I placed it on my plate, broke it apart with my chopsticks, and then picked up a small piece. Holding the chopsticks at a right angle to my mouth, much like a spoon, I slowly fed myself as though I were feeding a bird. By the time I had eaten only a little, Mother had already finished her entire meal. She quietly stood up, leaned her back against the wall where the morning sun was shining, and watched my awkward way of eating for a while.

'Kazuko, you're still no good,' she said. 'You need to learn to make breakfast the most enjoyable meal of the day.'

'What about you, Mother? Do you enjoy it?'

'Of course. I'm not sick anymore.'

"But I'm not sick either."

"No, no, you're not there yet."

Mother smiled sadly and shook her head. I remember how, five years ago, I was said to have tuberculosis and was bedridden for a while. But I know now that it was really just an illness

born of selfishness. However, Mother's recent illness—that was truly worrisome, a heartbreaking sickness. Even so, Mother was only ever concerned about me.

"Ah,"

I said.

"What is it?"

Mother asked this time.

We looked at each other, and there was a feeling that we understood everything without words.

When I chuckled, Mother smiled gently as well.

When you're overcome by an unbearable sense of embarrassment, that faint, peculiar cry of "Ah" escapes your lips. Suddenly, vivid memories of my divorce six years ago came flooding back to me, making it unbearable. Without thinking, I let out an "Ah." But what about Mother? Surely, she couldn't have a shameful past like mine. Or could it be... something else?

"Mother, you remembered something just now, didn't you? What was it?"

"I've forgotten,"

she replied.

"Was it about me?"

"No."

"Was it about Naoji?"

She started to say, "Yes," but then tilted her head slightly and said,

"Perhaps."

My younger brother, Naoji, was called up midway through university and sent to a southern island. However, all communication was lost, and even after the war ended, his whereabouts remained unknown. Mother has resigned herself to the belief that she will never see Naoji again, or so she says. But I have never once made such a "resignation." I am convinced that we will meet again.

"I thought I had given up," she said, "but after enjoying some delicious soup, I found myself thinking of Naoji and felt unbearably sad. I wish I had been kinder to him."

Ever since Naoji entered high school, he became deeply engrossed in literature, to the point of living almost like a delinquent. I can't even begin to count how much trouble he caused for Mother. Even so, as she sips a spoonful of soup, she thinks of Naoji and softly lets out an "Ah."

I stuffed a bite of rice into my mouth, feeling my eyes grow hot.

"Don't worry. Naoji will be fine. People like him—scoundrels like Naoji—don't die so easily. It's always the quiet, beautiful, gentle ones who die. But Naoji? Even if you hit him with a stick, he wouldn't die."

Mother laughed and teased me, saying, "Then does that mean you, Kazuko, are the type to die young?"

"What? Why? I'm a scoundrel myself! I'll live until I'm 80 without a problem."

"Is that so? Then I suppose that means I'll make it to 90."

"Of course," she began to say, but then seemed a little troubled. Scoundrels live long lives. Beautiful people die young. Mother is beautiful. Yet, I want her to live a long life. I was utterly bewildered.

When I said, "You're so mean!" my lower lip began to tremble, and tears welled up in my eyes before spilling over.

Shall I tell you a story about a snake? One afternoon, four or five days earlier, some neighborhood children had discovered about ten snake eggs in the bamboo grove by the garden fence. The children insisted,

"They're viper eggs."

Thinking that having ten vipers hatch in the bamboo grove would make it too dangerous to step into the garden, I said,

"Let's burn them."

The children jumped with excitement and followed me. Near the bamboo grove, we piled up some leaves and twigs and set them on fire, tossing the eggs into the flames one by one.

However, the eggs didn't burn easily. Even when the children threw more leaves and small branches onto the fire to strengthen it, the eggs still didn't seem to burn.

A young woman from the farmhouse below called out from beyond the fence, laughing,

"What are you doing?"

"We're burning viper eggs. It would be scary if vipers appeared," I replied.

"How big are they?" she asked.

"They're about the size of quail eggs and completely white," I answered.

"Well, then, they're just regular snake eggs, not viper eggs. Snake eggs are tough to burn, you know," she said, laughing as though she found it all very amusing before walking away.

Even after thirty minutes of burning, the eggs refused to burn. I had the children retrieve the eggs from the fire, bury them under the plum tree, and then I gathered some small stones to create a gravestone for them.

“Now, everyone, pray,” I said.

As I squatted down and clasped my hands together in prayer, the children quietly followed suit behind me. After parting ways with the children, I slowly climbed the stone steps alone. When I reached the top, I saw Mother standing in the shade of the wisteria trellis.

“What a cruel thing to do,” she said.

“They weren’t vipers, just regular snakes. But it’s okay; I made sure to give them a proper burial,” I replied, though I thought to myself that it might not have been a good idea for Mother to see what I had done.